

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21510286

研究課題名（和文） アジア現代女性史の研究：冷戦時代の国際女性運動とアジア

研究課題名（英文） A Study of Asian Contemporary Women's History:
Asia and the international women's movement during the Cold War

研究代表者

藤目ゆき (FUJIME YUKI)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：60222410

研究成果の概要（和文）：大規模な国際組織である WIDF（国際民主女性連盟）による世界平和運動の取り組み、またアジア各地の女性運動の展開を調査し、朝鮮戦争真相調査団の活動をはじめとして冷戦時代の国際女性運動の諸相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We have revealed details of activities of a very large international organization, WIDF (Women's International Democratic Federation) and its affiliated organizations in Asian countries, especially regarding the fact finding mission sent by WIDF to Korea and other peace movement during early cold war era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：(1) 国際民主女性連盟 (2) WIDF (Women's International Democratic Federation) (3) モニカ・フェルトン (4) ジレット・ジグラー (5) ルードウ・ドー・アマー (6) 朝鮮戦争

(7) 冷戦 (8) アジア現代女性史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2001 年～2002 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「東アジア冷戦とジェンダー」および 2004 年度～2007 年度科学研究費補助金基盤研究(A)「アジア現代女性史の研究：北東及び東南アジアにおける軍事主義とジェンダー」の交付を受け、アジア女性の歩みを第二次世界大戦後の民族独立運動、軍事政権との闘争、朝鮮戦争とベトナム戦争、米ソ冷戦終結後の社会変動とグローバリゼー

ションといった現代史の流れの中に位置づけ、戦争や軍事主義が女性に与えた影響やアジアと日本の女性の関係性を考察した。

本研究課題「アジア現代女性史の研究：冷戦時代の国際女性運動とアジア」は、これらの成果を引き継ぎ、さらに包括的・系統的な研究によってアジア現代女性史の全体像へ接近することを試みたものである。

2. 研究の目的

- (1) 研究目的の第一は、アジア現代女性史の全体に影響を与えた女性の国際組織について包括的に追跡することである。

特に焦点としたのは、第二次世界大戦中の反ファシズム運動を基盤として1945年に成立した国際女性組織である国際民主女性連盟(WIDF; Women's International Democratic Federation)の研究である。なぜなら、第二次世界大戦後の民族独立運動への支援、アジアにおける女性国際会議の開催、朝鮮戦争時代の平和運動、原水爆禁止運動、日本の母親運動の契機となった世界母親大会の開催、ベトナム反戦運動などを通してWIDFがアジア現代女性史に果たした役割はすこぶる大きいからである。

- (2) 研究目的の第二は、冷戦時代にアジア各国・地域で展開された様々な女性運動について、団体および女性活動家に光をあて、その成立経緯、理念、課題、活動内容などを具体的に明らかにすることである。

特に朝鮮戦争下の朝鮮民主女性同盟や独立促成愛国婦人会、ベトナム戦争下のベトナム女性団体連合会、またインドネシア9・30事件で壊滅したゲルワニ、日本の原水爆禁止・平和運動、「ビルマ人民の母」と呼ばれたジャーナリストであるルード・ド・アマーなどの研究を重視する。

3. 研究の方法

- (1) WIDFに関する資料を収集するために日本国内はもとより、英国の女性図書館・国立公文書館をはじめ、フランス、オランダ、ベルギー、ドイツなどの図書館・博物館・記念館などを訪問し、在欧研究者と研究交流を実施する。

- (2) アジア女性運動に関する調査については、ハノイの社会人文科学大学ジェンダー研究発展センター所長ル・ティ・ニャム・トゥエット、韓国の金貴玉と梁東淑、インドネシア社会史協会のラジフなど、内外の研究協力者の協力を得て、適宜現地調査を行って、資料収集を行う。

- (3) 研究代表者、研究分担社及び連携研究者、研究協力者らによるアジア現代女性史研究会を開催し、調査・研究の中間報告と討論を行う。また、研究成果を報告するために年報を刊行する。

4. 研究成果

- (1) 成果の第一の領域は、WIDF(国際民主女性連盟)に関する調査・研究である。

- ① WIDFは1945年創立大会(パリ)以後、70年代前半までに48年(ブダペスト)、53年(コペンハーゲン)、58年(ウィーン)、63年(モスクワ)、69年(ヘルシンキ)、75年(東ベルリン)と、国際女性大会を開催した。

また、他の国際NGOと共同して多くの重要な国際集会を組織した。55年の世界母親大会(ローザンヌ)、60年の国際女性デー50周年記念集会(コペンハーゲン)、欧州諸国女性の平和・軍備撤廃集会(サルツブルク)、1962年の軍備撤廃集会(ウィーン)、66年の児童保護国際会議(ウィーン)、70年の欧州の安全と協力に関する会議(イースタード)及びアジア・アフリカ・ラテンアメリカの女性問題に関する国際会議などである。

WIDFは、1972年に国連総会が1975年を国際女性年と指定するにあたっては、経済社会理事会を通じて推進力となった。平等・発展・平和を柱とする国際女性年の民間ベースの世界大会はWIDFのイニシアティブのもとに75年10月東ベルリンで行われた(140カ国1600人の代表参加)。

日本の女性団体はWIDFから1949年6月にアジア女性会議(北京)への参加を呼びかけられたが、占領下であり参加できなかった。占領期の日本では日本民主婦人協議会や婦人民主クラブが国内でWIDFと結びつきをもった。独立後の53年、WIDFの大会に日本最初の代表団が参加し、同年結成の日本人団体連合会が1957年10月にWIDFに正式に加盟した。

- ② このように世界女性運動史に重大な役割を果たしてきた組織でありながら、従来、WIDFに関する研究は乏しかった。

フランシスカ・デ・ハーンは、このような研究の乏しさの理由として女性史研究内部の冷戦的思考枠組みの継続を指摘している。

私たちは、ハーンらによるWIDFに関する新しい研究の成果にも学びつつ、アジア現代女性史研究の視点から、WIDFが展開した国際女性運動の研究に取り組んだ。

とりわけアジア女性史に関係の深い、WIDFが派遣した朝鮮戦争真相調査団に着目して、従来全く顧みられていなかったイギリスのモニカ・フェルトンやフランスのジレット・ジグレイといったヨーロッパからの参加者たちの体験をほりおこした。

(2) 成果の第二の領域は、ベトナム、インドネシア、日本、韓国、ビルマなど、アジア各地の女性運動に関する調査・研究である。

- ① ベトナムに関しては、片山須美子氏の協力を得てレ・ティ・ニャム・トゥエットによるベトナム女性史に関する研究書を訳出し、特にベトナムの抗仏独立闘争からベトナム戦争までの章を邦訳・出版した。
- ② インドネシアに関しては、1965年の9・30事件以後の民衆経験についてオーラルヒストリーのプロジェクトを進めているインドネシア社会史協会と連携して研究し、その成果の一端を邦訳・出版した。
- ③ 日本に関しては、広島湾地域に焦点をあてて、軍事的性暴力、女性たちによる平和運動、反核・反基地運動、占領軍被害者補償請求運動に関する研究に取り組んだ。
- ④ ビルマに関しては、世界的に著名なジャーナリスト・作家であり、WIDFの世界女性大会をはじめ、さまざまな国際会議にビルマを代表して出席・発言し、「ビルマ人民の母」と称されたルードゥ・ドー・アマー（1915年～2008年）の生涯を追跡した。
- ⑤ モンゴル・中国についても、それぞれのWIDF支部に関して重要な資料を收拾した。
- ⑥ 韓国に関しては日本軍「慰安婦」をめぐる女性運動や米軍基地村の接客女性への支援活動を行っている団体に関する調査を行い、重要な資料を訳出し、刊行した。
また、梁東淑・金貴玉ら在韓研究者との研究交流を積み重ね、これまでほとんど解明されてこなかった独立促成愛国婦人会など冷戦時代の右翼女性組織にも光を当てた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 藤目ゆき「第二次世界大戦後日本の「女性解放」について—繊維労働者の経験から考える」『アジア現代女性史』第5号、

2009年、108～126頁 査読無

- ② 南田みどり「雑誌『女性問題』に見る小説の役割について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、2009年、113～140頁 査読有
- ③ 藤目ゆき「広島県・山口県における占領軍被害」『アジア現代女性史』第6号、2010年、32～52頁 査読無
- ④ 南田みどり「日本占領期におけるビルマ文学—小説の役割を中心に」『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、2010年、109～136頁 査読有
- ⑤ 藤目ゆき「インドネシア9・30事件と民衆の記憶」『別冊飛礫』創刊号、2010年7月 査読無
- ⑥ 今岡良子「藤本幸久と出会った2010年」『アジア現代女性史』第6号、2010年12月、116-118頁 査読無
- ⑦ 藤目ゆき「WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち—鉄のカーテンを越えて」『アジア現代女性史』第7号、2012年、44～51頁 査読無
- ⑧ 藤目ゆき「モニカ・フェルトンとWIDFの朝鮮戦争真相調査団」『アジア現代女性史』第7号、2012年、70～96頁 査読無
- ⑨ 南田みどり「ビルマ語版『ビルマの堅琴』は何を語る?」『世界文学』第113号、2011年、29～41頁 査読有
- ⑩ 南田みどり「日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第5号、2011年、143～171頁 査読有
- ⑪ 南田みどり「ビルマ作家たちの『日本時代』」『大阪大学世界言語研究センター論集』第7号、2012年、283～310頁 査読有
- ⑫ 南田みどり「ルードゥ・ドー・アマーとは何者か」『アジア現代女性史』第7号、2012年、6～27頁 査読無

[学会発表] (計 3 件)

- ① 藤目ゆき「岩国の軍事化と性暴力」於第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京、分科会3「戦争と平和」、於オリンピック記念青少年総合センター 2010年9月
- ② 藤目ゆき「基地と性暴力—米兵レイプ事件にみる女性の人権」シンポジウム「現代社会と女性への暴力」(主催 女性学研究会・やまぐち) 2011年7月9日 於カリエンテ山口 (山口県山口市)
- ③ 藤目ゆき「日本における米軍の性売買・性暴力—岩国基地を中心に—」日韓合同シンポジウム「東アジア米軍基地問題と女性の人権」2011年12月16日 於 東

〔図書〕（計 11 件）

- ① 藤目ゆき「朝鮮戦争・女性・平和運動」『戦後日本スタディーズ①40・50年代』紀伊国屋書店、2009年、171～186
- ② 藤目ゆき「解説」『性暴力問題資料集成 第Ⅱ期 第26巻』不二出版、2009年、3～10頁
- ③ 藤目ゆき監修・ジョン・ローサ;アユ・ラティ;ヒルマル・ファリド編; 亀山恵理子訳『インドネシア九・三〇事件と民衆の記憶』（アジア現代女性史(5)）、2009年、総430頁
- ④ 藤目ゆき「제 2 차 세계대전 후 일본의 ‘여성해방’:섭유노동자의경험을통해서 (第2次世界大戦後日本の「女性解放」－ 織維労働者の経験を通じて)」（趙慶喜訳）金貴玉編『동아시아의 전쟁과 사회 (東アジアの戦争と社会)』ハヌル、韓国、2009年、151～188頁
- ⑤ 藤目ゆき監修『アジア現代女性史Ⅷ ベトナム女性史－フランス植民地時代からベトナム戦争まで』（トゥエット著、片山須美子訳）2010年12月、総293頁
- ⑥ 藤目ゆき『女性史からみた岩国米軍基地』ひろしま女性学研究所、2010年10月、総226頁
- ⑦ 南田みどり編訳『ティンペーミン短編集』大同生命国際文化基金、2010年、総257頁
- ⑧ 藤目ゆき「被差別部落と買売春」、三成美保・服藤早苗編『ジェンダー史叢書 権力とセクシャリティー』明石書店、2011年、259～280頁
- ⑨ 藤目ゆき「エンパワーメントを希求する女性たち－人身売買『被害者／犯罪者』という二項対立を超えて」中村安秀・河森正人編『グローバル人間学の世界』大阪大学出版会、2011年、52～69頁
- ⑩ 藤目ゆき「日米安保条約・米軍基地と女性への暴力」高雄きくえ編『思考するヒロシマへー性暴力・ジェンダー・法』ひろしま女性学研究所、2011年、28～38頁
- ⑩ Yuki Fujime, *Unrecognized Victims of Military Sexual Violence in Early Cold War Era in Japan*, Muta Kazue and Beverley Anne Yamamoto ed., “*The Gender Politics of War Memory Asia-Pacific and Beyond*”, Osaka

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤目 ゆき (FUJIME YUKI)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：60222410

(2) 研究分担者

山本ベバリー (YAMAMOTO BEVERLY)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：00223777

南田みどり (MINAMIDA MIDORI)
大阪大学・世界言語研究センター・教授
研究者番号：80116144

今岡良子 (IMAOKA RYOKO)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：50273735